

ア ス ク

Advise and Support Care services

介護サービス相談サポートセンター
福祉サービス第三者評価機関
地域密着型サービス外部評価機関

アスクニュースレター No. 3 2

2009年4月7日

発行 特定非営利活動法人アスク
発行人 佐藤由紀子

〒325-0074 栃木県那須塩原市松浦町118-189

TEL/FAX : 0 2 8 7 - 6 2 - 4 3 1 0

E-mail : npo.asc@nasuinfo.or.jp

web : <http://asc.nas.ne.jp/>

評価者からのメッセージ

なぜ那須に永住？ ～「まさか！？」～

川村 賢磨（かわむら よしまろ）

友人に良く聞かれることがあります。なぜ那須に永住なの、と。

人生には、上り坂や下り坂の外に「まさか」という坂があると誰かが言いました。本当にそうだなと、つくづく思います。

私は昭和20年3月10日、出生の地・日本橋浜町で東京大空襲に遭遇しました。その後母の生家のある熊本に疎開し終戦を迎えました。

九州で高校を卒業後、博多で就職、そして長崎、広島、東京と移り住みました。

広島には実に24年もの間住んでいました。ですから50年来の親交の方も多く、私と家族にとって第二の故郷でもあるわけです。

東京で定年をむかえましたが、その直前に大病をしました。偶々娘夫婦が栃木県那須塩原市にて家畜診療所を開業しており、病後のケアを含めて同居しないかとの奨めで移り住みました。

思えば70数年余の生活、実にたくさんの、「坂」を経験しました。大病から栃木への移住も一つの大きな坂でありました。希望であった、定年後は「広島か福岡へ」の思いも絶ち退職しました。しかしそのお蔭で、綺麗な空気と水に恵まれた自然の大地の中で、出会った沢山の人から温かく優しい心を頂いて、心身共に健康を取り戻すことが出来ました。今では元気に時々ゴルフをし、時々多くの仲間とボランティアをして過ごしております。

娘夫婦には心から感謝しています。博多生まれ育ちの妻と共に「博多」のことは勿論のこと、「広島」のことも、ひと時も忘れたことは有りません。遠く離れて想う二つの故郷です。

人生道というのは信号機も道路標識も無い道ですが、「まさか」に遭遇する度に過去を見返りながら、新たな道標を得ることが出来たのだと心から思っています。

私達家族にとって那須は永住の地、安穩の故郷となりました。全国をあちこちと移り住みながらも那須へ、本当に「まさか！！」であり、思ってもいなかったことが現実となりました。

多くの人に接したお蔭で、人の温かさ優しさを身にしみて知ることが出来、融和と和合の大切さもたくさん学ぶことが出来ました。

さて、これから先どんな「まさか」が待っているのでしょうか。ちょっぴり不安でもあり、また楽しみでもあります。

（栃木県福祉サービス第三者評価調査者、栃木県ボランティア連絡協議会副会長）

「参加型福祉」の実現をめざす 社会福祉法人いきいき福祉会 小川泰子さんのお話を聞いて

3月17日、栃木県生活協同組合連合会福祉事業委員会が主催する研修交流会において、社会福祉法人いきいき福祉会（ラポール・グループ）の専務理事・小川泰子さんから、法人が運営する諸事業の特徴やめざしている方向についてお話しを伺いました。昨年9月にいきいき福祉会のいくつかの事業所を視察し、ニュースレター30号で紹介していますのでご参照下さい。

田中義博（アスク理事、企業組合とちぎ労働福祉事業団理事、社会保険労務士、中小企業診断士）

生協で初めての社会福祉法人

いきいき福祉会は、生活クラブ生協（神奈川県）が母体となり、1994年に生協関係では全国で初めて特別養護老人ホーム（ラポール藤沢）を開設した社会福祉法人です。今年4月には横浜市三ツ沢に2ヶ所目の特別養護老人ホームを開所し、通所介護なども含めて全部で25の事業を運営しています。

参加型福祉

ラポール・グループの事業は、多様な市民力によって支えられる「参加型福祉」の実現を追求しています。具体的には、ワーカーズ・コレクティブ、市民パートナー（ボランティア）、福祉オンブズマンなどが運営に参加する仕組みが特徴的です。

雇われない自発的な働き方をめざす「ワーカーズ・コレクティブ*」は地域に密着した多彩な事業を行っており、施設内の各種運営業務に参加することにより、「住まい」の空間の中に地域の風を入れるという意味で、大きな貢献をしています。ラポール藤沢では、ワーカーズ・コレクティブが市民パートナー（ボランティア）をコーディネートしたり、デイサービスの運営に係ったりする役割を果たしています。また、地域で移動サービスを行うワーカーズ・コレクティブが入居者の方々の外出支援を行うなど、市民がラポール藤沢と連携し合って活動しています。

市民目線で福祉サービスを点検

外部のNPO法人「湘南ふくしネットワークオンブズマン」のオンブズパーソンが定期的に来訪し、利用者の代弁機能を果たしているとともに、福祉サービス第三者評価も定期的な受審されている様子でした。市民力による外部の評価を受ける一方、地域の人たちがオープンに出入りできる関係をつくることにより、事業所のサービスや職員の行動について、常に市民目線で点検を受ける関係がつくられています。

福祉に民主主義を

お話の中で最も印象に残った言葉のひとつは「福祉（の世界）に民主主義をつくるのが生協の役割」です。そのために、国の政策を変えていけるよう、各事業から得られた経験や実践、成果、課題を発信していく責任があると述べています。二つめは、「人権の尊重を他人に話せる福祉職」を養成したいという言葉でした。介護職員の教育に力を入れ、施設長には職員のめざすモデルになれるような人を充てています。外国人の職員（ブラジル、ベトナム、中国、韓国など）も雇用し、国籍、正規・非正規を差別せず昇進の機会を開いており、高齢になっても働けるような職場をめざしています。

生活まるごと福祉

自分らしく暮らせるよう、生活まるごとを

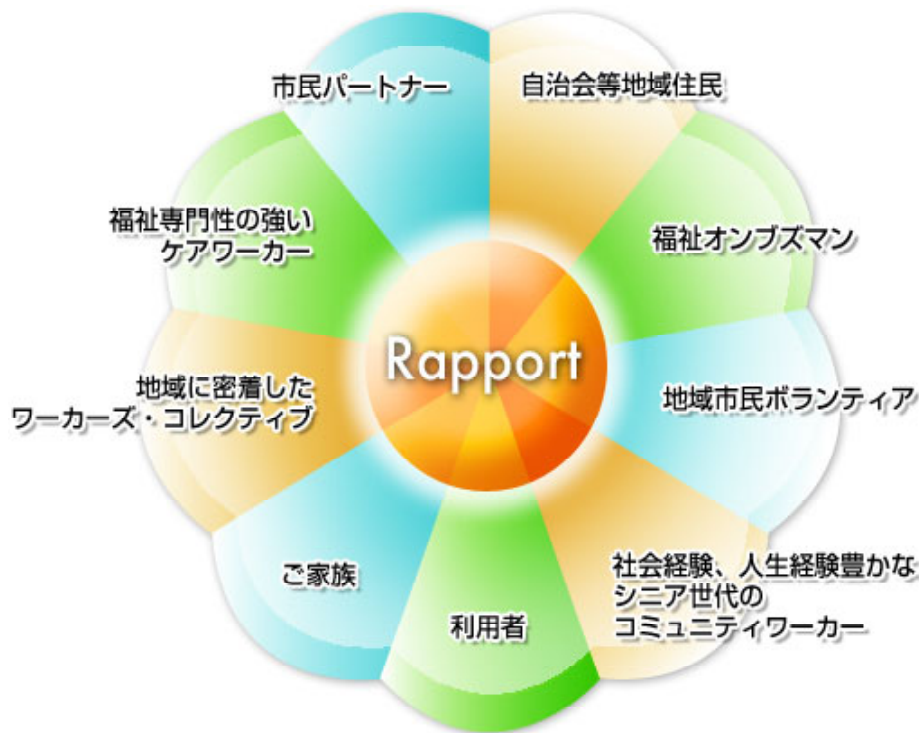
「福祉」だと考え、利用者も働く人も、ボランティアも、お互いに生活を支え合う関係づくりを進めようとしています。また、石けん洗剤を使用するなど環境対策にも取り組んでいます。地域の多様なニーズを捉え、サービスの対象は高齢者のみならず、障がい者、子育て中の親、地域住民へと広がっています。

市民力・地域力を

北欧のような高負担・高福祉ではなく、中（低）負担・中（低）福祉をめざしている日本の現状を、少ない負担で「中の上の福祉」に引き上げるためには、市民の知恵を活かし

地域の力を結集することで、福祉の隙間を埋めていかねばなりません。いきいき福祉会には25の事業所がありますが、これで満足するのではなく、支援を必要としている人の生活を24時間365日支えるためにどんなサービスがふさわしいか、そのための地域の拠点をどう作るかを市民や諸団体と模索しようとしています。

市民運動が母体となった福祉施設としての特徴を十分に発揮しており、ラポール・グループの実践には今後も注目し、学んでいきたいと思いました。



ラポールの参加型運営（ラポールグループのホームページより転載）

*ワーカーズ・コレクティブ

ワーカーズ・コレクティブとは、雇う・雇われるという関係ではなく、働く者同士が共同で出資して、それぞれが事業主として対等に働く労働者協同組合のことである。欧米では、19世紀の産業革命の中から生まれたワーカーズ・コレクティブが着実に数を増やしてきた。日本でも戦前から、本格的な労働者生産協同組合はあったが、その存在が目立ってきたのは1980年代以降である。高齢者雇用の創出という関心から出発して、1987年に高齢者就労事業団から名称を変更した日本労働者協同組合連合会は、ワ

ーカーズ・コレクティブの代表的な存在であり、労働者協同組合法案の制定を求める運動をしている。このほか、生活協同組合などを中心に、介護や育児など主婦としての経験を生かしてコミュニティービジネスを展開するワーカーズ・コレクティブも急速に拡大している。ILOは2002年6月の第90回総会で「協同組合の促進に関する第193号勧告」を採択し、就労の創出、労働の再生に向けた協同組合の可能性に期待している。

<http://www.arsvi.com/d/w05.htm> より

第12回 地域サロン・宅老所・グループホーム 全国研究交流会フォーラム in しが

「認知症になっても、障がいがあっても、いつまでも私らしく、住み慣れた所で、みんなと一緒に、支え合って暮らし続けられる、地域や社会をつくる！」のキャッチフレーズのもと、2月21, 22日の両日、滋賀県大津市でフォーラムが開催されました。滋賀県は障がい者施設「近江学園」を創設した、糸賀一雄・田村一二・池田太郎の三氏の思想が息づく地域で、公的、私的を問わずさまざまな地域福祉の取り組みが実践されています。今回のフォーラムでは、多様な地域での暮らし方を柔軟に支える“宅老所”や“あったかホーム”の活動に焦点を当てて、「持ちつ持たれつの関係づくり・暮らし支え合い」のあり方が発表され、議論されました。

佐藤由紀子（アスク理事長、民生委員・児童委員、那須塩原市介護保険運営協議会委員）

糸賀・田村・池田の思想が息づく街で

昭和21年（1946年）に、糸賀たちが「近江学園」を創設した。学園には知的障害のある子どもたちだけでなく、戦災孤児や浮浪児、職員の子もたちもいて、共に生活し、共に耕し、一緒に教育を受けさせていた。そのなかで、強い子が弱い子をいたわることができるようになった。「この子たちを世の光に」と糸賀が表現している。

糸賀は「どんなに障害が重くても、誰もが主体的に、社会的に生きて発達する権利がある」と考え、田村は「人は誰も水平な関係にあり、共に生きていかねばならない」と表し、池田は「街や村の中で、街の人、村の人と一緒に働き、暮らしていく必要がある」と述べている。滋賀県では、年齢別、障害別、生活の困難別を超えた「一緒に・共に」という福祉が発達しており、糸賀たちの考えが脈々と受け継がれている様を見ることができる。

茗荷村の活動

茗荷村は行政単位の「村」ではなく、田村の考えがもとになっている「共同体」である。障害者の問題は、施設の中だけでは解決せず、社会の側が変わらないかぎり解決しないとして、異質なものを、違ったタイプの人々が共にあること（Social inclusion）をめざしている。琵琶湖の東、東近江市から愛荘町にかけて現在15世帯が農作業や畜産を営み、血縁による家族ばかりではなく、地域移行をめざした障

碍者や児童相談所から引き受けた里子も一緒に暮らしている。

パネルディスカッションのコーディネーター中村大蔵氏（尼崎・特養「園田園」園長）は、事前に「茗荷村」を訪問して、その開けっぴろげな、来訪者を心から歓迎する様に感激したと述べていた。

街かどケア滋賀ネット

滋賀県では介護保険が始まる前から宅老所の活動が始まっており、一方で、障害者のデイサービスや作業所の活動も活発で、それらが相互乗り入れした共生型デイの設立も盛んである。それらの事業所が情報交換・交流のためにネットワークを組んでいる。今回のフォーラムを機に、宅老所、小規模デイ、小規模多機能型居宅介護、あったかホーム（生きがいデイ等を併設したまちづくりの拠点）、グループホームなどの小規模ケアの数を集計したところ、100ヶ所弱になったということである。

また、ネットワークでは、知的障害者の新しい働き方として、3級ヘルパー資格の取得

『知的障がいのある人たちの新しい働き方「その人の“ならでは”の働き』2007年度知的障害者の介護施設における就労支援のあり方研究事業報告書



と、デイサービスへの就労を進める事業を行っている。就労して終わりというのではなく、その後の状況を調査し、次へつなげる事業も行っている。地域サロン「衣川台オアシス」

大津市の衣川地区に30年前に開発された住宅地で、7年前に設立された地域サロンが「衣川台オアシス」である。設立の中心になった田中正彦さんが、定年後に地域の人との関わりを持ちたいとボランティアスタッフを募って始めた。地区には365世帯1150人余が住んでおり、高齢化率は19.8%（県平均19.5%）であるが、要支援や要介護者が増えている。

週1回自治会館で「おしゃべりサロン」を開催し、100円コーヒーを提供している。講演会や出前講座、趣味・手芸、体操などの他、お花見、餅つき大会などイベントも実施している。100歳を迎えた2名の高齢者を祝う会は大変盛り上がった。「いずれは世話になる施設や介護サービスを受けるのを少しでも先延ばしにしよう」がキャッチフレーズである。この100歳の参加者は他の参加者の見習うべきお手本となっている。地区内には商店がなく、高齢化した住民が不便を来しているため、買い物サポートをしたり、入浴サポートも活動のメニューである。

28名に増えたボランティアスタッフ（女19名、男9名）が交替で運営にあっている。参加者は毎回平均25名、地区の80歳以上の半数が参加している。今後の課題は残りの半数の参加をどう図るか、それぞれのニーズに如何に応えるか、である。

小規模ケア・全国の取り組み

今回のフォーラムには全国で特徴的な小規模ケアを実践している人からの報告があった。那須塩原市の飯島恵子さんもNPO法人ゆいの里が運営する、街中サロン事業「なじみ庵」の活動を報告した。「なじみ庵」は西那須野駅に近いマンションの1階空き店舗を活用し、地域の縁側として誰でもがつかい、趣味を生かし、高齢者の活力を引き出す活動を行っており、07年「あしたのまち・くらしづくり活動賞全国奨励賞」を受賞した。

飯島さんは介護保険事業のデイサービスなども運営しているが、これらの経験から、「今時の介護保険はサービスが行き届きすぎて、高齢者ができることも取り上げてしまっているのではないか」との疑問を抱き、高齢になってできなくなることが多くなっても、残されている能力を自己資源として発揮することが大切だと考えている。支援者は、「して差し上げること」と「できることを引き出してあげること」とのせめぎ合い、折り合いを付けるための「コミュニティ・コーディネーター」黒衣であると表現している。

このほか、空き店舗利用や自宅開放の活動など多くの発表があり、どれも大変感動的であった。制度の中で粛々とサービスが提供されることも利用者にとっては大事なことである。一方で、制度の壁にたち塞がれながらも、制度にはじき出された生活困難者（例えば統合失調症患者など）が何とか居場所を確保し、元気になっていくような働きをしている事例もあった。さらに、がんばっている行政職員からの報告もあって、日本全体は閉塞感があるが、希望も見えたフォーラムであった。最後に、わが街でも

私の住む町内でも高齢者の「生きがいサロン」が4月から始まる。那須塩原市から運営費の補助があり、自治公民館などを利用し、月に2回程度開催される。地域住民の中から自発的に集まった運営委員による自主運営で、民生委員の私もその一員である。運営委員はもうすぐ高齢者の仲間入り、という人が多く、かつて子育ての時期に子ども会・育成会を仕切っていた強者揃い。上記のような個性的な取り組みには遠く及ばないが、ゲームや手芸、健康体操、歌、花見、敬老会などなど多彩なプログラムを考えているところである。

「生きがいサロン」には、ご近所づきあいの再構築、仲間作り、防犯、見守り、支え合いなど、いろいろな役割が期待されている。はたしてどんな首尾になることやら。運営委員が先走って仕切るのではなく、一緒に楽しい場をつくっていくことが肝要で、気楽に、気長に続けることができればと思っている。



生きるって素敵なこと！

名取美和が問いかける「幸せのかたち」

佐保 美恵子 著

講談社 刊

1470円(税込み)

2003年12月1日発行

この本に書かれている名取美和さんはチェンマイにある「バーンロムサイ」という、エイズで両親を亡くし自らもHIVに母子感染した子どもたちの生活施設の代表を務めている。彼女の生き方に魅了されたカメラマンとフリーライター夫妻の作った本だ。

本の前半は、16才でドイツに留学デザインの勉強をし、19才から自立自活の道を走り続け、子育てと仕事をしながら日本とヨーロッパで生きてきた名取さんの半生記。同年代の私には信じられない自由奔放、破天荒な生き方なのだ。

50才になった彼女は、マイペースでできる布製品のデザインの仕事を始めようと素材の布を探しにチェンマイに行き、「バーンロムサイ」設立にかかわる。設立までと思っていたのに、HIVのことをほとんど知らなかった彼女が、この大きな問題の奥深さを知れば知るほどどんどん元の破天荒だった頃のエネルギーを取り戻し、活動にのめり込んでいく。差別や偏見に毅然と立ち向かい、幼い命が消えていく現実に涙しながらも、自分も子どもたちもスタッフも楽しく心地よく暮らせる場を作り上げていく。「けっして自己犠牲ではなく、自分の生活をまず第一に楽しみながらのボランティア、それが大切」と彼女は言う。

佐保 美恵子(サホ・ミエコ) 1958年大分県生まれ。ルポライター。学習院大学文学部卒業後、ファッション雑誌編集者などを経て、1987年からフリーランスに。以降は、雑誌「AERA」、「コスモポリタン」などでルポルタージュを中心に活躍する。2004年10月からは、タイ・チェンマイに家族で移り住み、いのちのこと、子供の問題などを中心に、取材執筆活動を続けている。著書：『マリーの選択 アパルトヘイトを超えた愛』(1994年文芸春秋)『千の風にいやされてあとに残された人々は、悲しみをどうのりこえたか』(講談社)ほか訳本など

おいしいご飯を食べる、学校に通う、将来の夢を語り合う、今日も一日生きられた感謝、という、私たちには当たり前すぎてそれが幸せなことだとは忘れていたシンプルな幸せ。いつ消えるかもしれない幼い命との生活ではそれがなにより一番の幸せ、生きているだけで素敵なのだと言っている。

「バーンロムサイ」のことを教えてくれた友人も、重度の障害を持つ娘にいつも「生きているだけで素敵」と言っている。それを聞いて私はいつもほっとしていた。名取さんも友人もともに命にまっすぐに向きあっている人の言葉は同じだった。

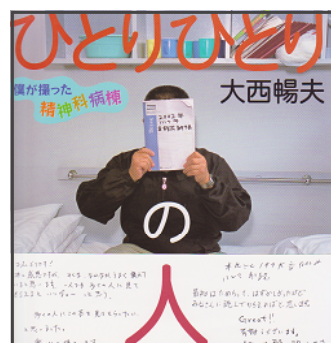
シンプルな幸せ、生きているだけで素敵、というのに気がつく、日常のこまごまとしたことで悩んだりつまずいたりしていることが、ちっぽけなことと感ぜられて、生きていること自体をもっと楽しもうとする元気が出る本。(HN)

ひとりひとりの人 僕が撮った精神科病棟

大西暢夫 著 精神看護出版 刊 1890円 2004年6月1日発行

精神科病棟に暮らす(入院している)患者のポートレート集。

カメラマン大西さんとの信頼関係が醸し出す、患者さんひとりひとりの笑顔がいい。



ケアマネさん、あなたのつぶやきを聞かせてください！

一人暮らしの生活をどうやって支えたらいいの

福祉の職場は低賃金で離職者が多い職場である。ある小規模施設の管理者が、結婚して子どもができたので辞めたと聞いた。寿退社したその管理者ははっきり女性だと思った。でも聞いたら男性であった。不思議に思っていたら「給料が安くて妻子を養えないので、転職する人がいる。福祉の現場では、寿退社は男性の場合もある」と福祉職の息子に言われた。そんなに給料が安いのかと改めて知らされた。

介護保険が4月から新報酬体系となる。介護の現場はきつい仕事のわりに給料が安い、資格を持ちながら離職する人が後を絶たない。そのために介護報酬を3%引き上げることで、介護職員の月収の平均2万円アップを目指すと当初は言われていた。しかし、具体的な報酬体系が示されると職員給与に反映できるほどの収入増にならないことが明らかになった。

グループホームなどは、退去時相談や夜間ケア、緊急時受け入れなど加算はついたが、そのための体制強化もしなくてはならない、単純に加算を受けられる状況でない。介護報酬が増えるのは一定条件を満たした事業所のみで、職員全員の賃金が一律に上がるわけではない。小規模事業所は介護報酬アップを苦しい運営資金に充てなければならない。職員の賃金にまで回らないのが現状である。ぬか喜びであった。

利用者にはどんな影響があるのだろうか。専門職を配置したり、体制を強化した質の高いサービスを利用した場合、加算という形でサービス単価が上がる。質の高いサービスが受けられるのは良いが、サービス単価が上がるのでその分自己負担も増える。また、今まで限度額いっぱい利用していた人は、利用回数を減らさないと、限度額を越えた部分は、全額自己負担となる。

私の担当するAさんは、一人暮らしで、歩行が困難ではあるが、前向きで聡明な方である。介護保険のサービスを上手く利用して一人での生活を成り立たせている。デイサービス、定期診察やリハビリのための通院介助、食料品や日用品の買い物支援を要介護1の限度額ぎりぎりまで利用して生活をしている。4月からデイサービスに加算がつきサービス単価が上がった。今までと同様のサービスを同じ回数使うと限度額を超えてしまう。

経済的に余裕があれば全額負担して同様のサービスを使うことはできる。でも、Aさんは、経済的に余裕はない。一人暮らしで家族の支援も望めない。限度額以内に抑えるためサービスをカットせざるを得ない。どのサービスを減らしたら良いかケアマネとして苦渋の選択を迫られる。

Aさんは、今年中に要介護認定を受けなくてはならない。今回改正された要介護認定システムは、軽度と判定されるとの指摘がある。3年前予防給付が導入されたとき、Aさんは歩行が困難で家の中を這って移動している状態でも要支援と判定された。その時、区分変更申請で要介護1に戻した経過がある。今回の改正ではその時以上に軽度と判定されるおそれがある。もし、要支援にでもなれば、少ないサービスで生活は支えられなくなる。今でも一人暮らしの生活を支えるには十分とは言えない。

どうしよう。ケアマネとして限界、苦渋の日々が続く。

アスクの活動から

《地域密着型サービス外部評価》 W A M N E T (<http://www.wam.go.jp/>)

小規模多機能型居宅介護事業所 みずばしょう (大田原市) 評価結果公表

認知症対応型共同生活介護事業所 グループホーム ピオニー (大田原市) 評価結果公表

《福祉サービス第三者評価》 とちぎ福祉サービス第三者評価推進機構 (<http://www.tfhs.jp/>)

特別養護老人ホーム ひまわり (都賀町) 評価結果公表予定

アスクが担当した事業所の評価結果は、アスクのホームページからも見る事が出来ます。

インフォメーション

特定非営利活動法人アスク 2009年度「総会」のご案内

日 程 2009年5月10日(日) 10:00~12:00 予定

会 場 那須塩原市 いきいきふれあいセンター 2階研修室 (那須塩原市桜町6-337)

内 容 2008年度事業報告・2008年度決算報告・監査報告

2009年度事業計画・2009年度予算 ほか

連絡先 アスク事務局【FAX 0287-62-4310 E-mail: npo.asc@nasuinfo.or.jp】

会員は出欠の連絡と委任状の提出をお願いいたします。

総会には誰でもご参加いただけます。

介護する家族の交流会 主催:(財)さわやか福祉財団フレンズ連絡会

日 時 4月11日(土) 18:30~20:30

会 場 ゆめプラザ・那須 第1会議室 参加料 無料

連絡先 「だいじ!だいじ!会議」世話人 さわやか福祉財団さわやかインストラクター

荒木純子 TEL/FAX 0287-76-2281 携帯 080-1168-2929

ハスカップ・セミナー2009 市民福祉情報オフィス・ハスカップ <http://haskap.net/>

「市民福祉」とはなにか? 4月21日(火) 18:30~ 東京しごとセンターセミナー室

ゲスト・須田春海さん(市民運動全国センター代表世話人)

主治医意見書ってなに? 5月21日(木) 18:30~ 会場未定

ゲスト・太田秀樹さん(医療法人アススム理事長)

介護保険ホットライン2009

6月17日(水) 18日(木) 19日(金)の3日間、電話相談「介護保険ホットライン2009」を開設する予定。

ハスカップ・セミナーと介護保険ホットラインについての問い合わせは下記へ。

TEL 090-5786-8700 (市民福祉情報オフィス・ハスカップ)

FAX 03-3303-4739 (『Better Care』編集部)

寄稿 歓迎

次号のニュースレターは7月発行予定です。読者からの情報や投稿を歓迎いたします。書籍紹介欄に取り上げるのにふさわしい書籍をご紹介下さい。新本、旧本を問いません。400字程度の紹介文を付けていただくとありがたいです。

原稿は表紙のニュースレター発行元へ、6月末までにメール又はFAXでお送り下さい。